

洗礼者聖ヨハネの誕生

ルカ 1:57-66, 80

2012/06/24

イエズス会助祭 小暮康久

今日、教会は洗礼者ヨハネの誕生を祝っています。洗礼者ヨハネについて教会がどのように祝ってきたのか、それは今日のミサの中で唱えられる叙唱の中にとてもきれいにまとめられています。お手元にある「聖書と典礼」の最後のページをご覧くださいませ。そこに今日の叙唱が印刷されていますので、一緒に確認してみたいと思います。まず冒頭に「キリストの先駆者ヨハネ」という表現があります。そして次の段落では、洗礼者ヨハネの生涯全体を思い起させるような具体的な出来事が次々と上げられていきます。すなわち、／すでに母の胎内で救いの訪れを受けたこと／その誕生は人々に喜びをもたらしたこと／すべての預言者の中から選ばれたこと／世の罪を取り除く神の小羊を告げ知らせたこと／ヨルダン川で救い主に洗礼を授けたこと／殉教によってその使命を全うしたこと／…この叙唱にあるように、たしかに洗礼者ヨハネの生涯は「キリストの先駆者」として、その使命を全うした生涯でした。その生涯のうちに示された神様の偉大なわざを教会は讃え祝っているのです。

今日、教会は洗礼者ヨハネの生涯を思い起しているのですが、私たちはどこかで「彼はキリストの先駆者としての使命を与えられた、私たちとは違う特別な方、偉大な方だから」と、まるで私たちとは別の存在のように考えてしまっているところはないでしょうか。たしかに洗礼者ヨハネは教会にとってかけがえのない偉大な方です。しかし、同時に洗礼者ヨハネは私たちと同じ人間だったのです。「キリストの先駆者」という途轍もない使命を生き抜いたのは私たちと同じ人間だったのです。私は思いを馳せませ。そんな途轍もない使命を負った生涯を、彼は何を見つめ、何を思いながら、そしてどんなふうには歩き続けていったのかと。洗礼者ヨハネの生涯を支え続けたものとはいったい何だったのでしょうか。そこに彼の偉大さの秘密があるように思います。イエス様ご自身も洗礼者ヨハネについておっしゃっています。「預言者以上の者、…およそ女から生まれた者のうち、ヨハネより偉大な者はいない」(ルカ 7:28)と。洗礼者ヨハネの偉大さとはどこにあるのでしょうか。今日は、洗礼者ヨハネの生涯を思い起しながら、その生涯が語るメッセージに耳を傾けてみたいと思います。

ルカ福音書 1章～4章では、「洗礼者ヨハネの誕生の予告ーイエスの誕生の予告」、「洗礼者ヨハネの誕生ーイエスの誕生」、「洗礼者ヨハネの宣教ーイエスの宣教」というように順序立てて語られています。「キリストの先駆者」としての使命とは、このようにいつもイエス様の少し先を歩きながら、その道を準備するための人生だったということです。自分のためではなく、イエス様のために準備をする人生、それが洗礼者ヨハネに神様から与えられた使命でした。しかしその使命は決して易しいものではなかったはず。それはその誕生の時から予感されていました。

「不妊の女」と周りから言われて既に年をとっていたエリザベトと、夫ザカリアにとって、この初めての幼子の誕生はどんなに嬉しかったことでしょう。しかし同時に、天使ガブリエルによって告知されたこの誕生に、両親はこの幼子がやがて自分たちの元を去っていくかもしれないということを予感して

いたかもしれません。今日の福音の最後には、「幼子は身も心も健やかに育ち、イスラエルの人々の前に現れるまで荒れ野にいた。」と簡単に書き留めています。そこには親子の別離というドラマがあったはず。両親とヨハネ自身にとってこれは過酷な現実であったはず。身も心も健やかに育ったヨハネでしたが、ある時期にはっきりと神様からの召命を受けたでしょう。来たるべき救い主のために道を準備するため、荒れ野に退くという決断をする時が来たのです。ただ神の声だけに従う時、その時、人間的にはつらい決断になることがあります。身も心も健やかに育ったヨハネです。年老いてから自分を産み育ててくれた両親を愛し大切に思っていなかったわけがありません。年をとってやっと授かった一人息子が自分たちの元を去って行ってしまふその両親の寂しさと辛さ、また年老いた両親を残して去っていかねばならないヨハネの寂しさと辛さ、…それはどれほどのものだったのでしょうか。ヨハネはきつとこの最初の、両親との別れという辛い決断を捧げることを通して、自分の使命をはっきりと見つめ始めたのだと思います。「キリストの先駆者」としての使命は、簡単に実現されたものではなく、福音書の行間に隠れたこのような一つ一つの犠牲を捧げ続けていくその歩みの中で深まり続けていったのだと思います。たとえ人間的には苦しくとも、神に応え、自分の足でその一歩を進めていく時に初めて、自分の使命は、その姿を少しずつ現わしていくものなのだと思います。両親との別離という決断によって、ヨハネは、「キリストの先駆者」洗礼者ヨハネへと一歩を踏み出したのです。

ただ神の声に聴き従うために荒野に退いたヨハネは、その荒涼とした沈黙の世界で、一人何を見つめ、何を聴いていたのでしょうか。福音書には、「ヨハネは、らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べ物としていた。」とだけ記し何も語りません。しかしおそらく10年以上であったろうその沈黙の時期こそ、ヨハネを洗礼者ヨハネへと変えた時間であったはず。それは想像以上に厳しい、それだからこそ神だけを頼りにする日々であったろうと思います。苛酷で孤独な日々の中で、時には両親や友たちが住む元の世界へ戻りたいという気持ちが起きなかったわけがありません。そのような誘惑の中で、自らの弱さと貧しさ、罪というものとも直面し続けたはず。しかし、そのような10年以上の沈黙の時期を破って、ヨハネは洗礼者ヨハネとして再び人々の前に現れたのです。そこにはこの苛酷な沈黙の時期を支え導き続けた神の恵み、ヨハネと神との深い繋がりがあったことを、福音書の行間は語っていると思います。

ルカ福音書の3章の冒頭ではこう記されています。「神の言葉が荒れ野でザカリヤの子ヨハネに降った。そこで、ヨハネはヨルダン川沿いの地方一帯に行き、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。…そこでヨハネは、洗礼を授けてもらおうとして出て来た群衆に言った。「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。」 洗礼者ヨハネとして再び人々の前に現れた時、彼は厳しい言葉を語り始めます。彼はどんな眼差しで人々にこの厳しい言葉を語ったのでしょうか。人々を見下すように上から断罪の言葉を語ったのでしょうか。そうではないと思います。何故ならこれは神の言葉であり、人々の耳に痛いことであっても、「神の言葉を語る」ことこそが預言者の使命だからです。そして、悔い改めよとは、倫理的な次元での一つ一つの過ちを反省するというのではなく、もっと根本的に、自分の生き方を変えること、つまり神様に立ち返れという意味です。

差し迫った神の裁きと悔い改めを叫ぶ厳しいイメージの強い洗礼者ヨハネですが、「ヨハネ」と訳され

ているこの名前の元々のヘブライ語「ヨハナン」(王下 25:23)は「主(ヤハウェ)は恵み深い」という意味なのです。そしてこの名前を彼に与えたのは両親ではなく、神様御自身でした。その誕生の前に天使ガブリエルを通して、ヨハネの厳しさの裏には「主(ヤハウェ)は恵み深い」という面が隠されているのだということです。

洗礼者ヨハネの悔い改めの洗礼はパレスティナ全体に知れわたり、彼の周りにはたくさんの弟子たちが集まり始めました。そんな時です。終にイエス様と出会う時がやってきます。イエス様が歩いて自分の方にやって来るのを、彼はどんな思いで見つめていたのでしょうか。この時、この出会いのためにこそ彼は生きてきたのですから。そして、イエス様が「世の罪を取り除く神の小羊」であることを証し、洗礼を授けます。

しかし、その自らの証しによって、彼の弟子たちは一人、また一人と自分の元を去り、イエス様の下へ行きます。自分の弟子が自分の下を去って他の人の下へ行く、人間的に見ればこんなに寂しいことはないでしょう。しかし、その時、洗礼者ヨハネは言うのです。「あの方は栄え、わたしは衰えねばならない。」(ヨハ 3:30)ただ神の声に聴き従い、自分の使命を歩き続けてきた洗礼者ヨハネだからこそ言える言葉だと思います。

そして最期の時が来ます。ヘロデに捕えられ投獄された暗闇の中で、一人、何を思っていたのでしょうか。恐らく、洗礼者ヨハネならば、権力者たちの欲望に翻弄されるように自分の最期の時が間近に迫っていることを予感していたでしょう。その時、彼の心にあったのは絶望だったのでしょうか。きっと、その暗闇の中で、彼は幼い時からの自分の人生を思い返していたと思います。幸せな幼少時代、神様からの召命を受けた日、愛する両親との別離、荒野での神様だけを頼りにする孤独な日々、預言者として厳しくも「神の言葉」を語った日々、そして生涯忘れることのできないイエス様とのあの出会いの日、去っていく弟子たち…そして今、醜悪な権力者たちの手によって殺されようとしている…。外から見れば、洗礼者ヨハネの人生ほどみじめなものはないかも知れません。しかし、その暗闇の中で、洗礼者ヨハネは呟いたと思います。「これでよかった」と。

その死は、イエスの十字架上の死を予感させるものでした。「キリストの先駆者」としての使命は、その死をも含んでいたからです。洗礼者ヨハネの最期の瞬間、その胸に去来していたのは、絶望ではなく、使命を生き抜いた静かな喜びであったろうと思います。

洗礼者ヨハネの偉大さとは、生涯をかけて、神の声に聴き従い、自分の使命を歩き続け深め続けていったところにあると思います。だからこそ、そこに神様の偉大なわざが現れたのです。

しかし、私たち一人一人も自分の使命が与えられているという意味では洗礼者ヨハネと同じなのです。洗礼者ヨハネの生涯が私たちに語るメッセージ、それは、私たちも、神の声に聴き従い、自分の使命へと一歩を踏み出し、歩き続けて行くならば、その時そこに、神様の偉大なわざが現れるということなのだと思います。

(4240字)